

# neo

MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

Spring  
2025

#07



心安らぐ日々を医療と共に。

福井大学医学部附属病院呼吸器外科  
科長・准教授・診療教授

佐々木 正人

特定医療法人さくら千寿会  
さくら病院 院長

片山 寛次

さくら通り整形外科クリニック  
院長

宇賀治 修平

坂井市立三国病院  
看護部

川端 真由美 / 篠崎 瑛子 / 濱口 忍

02

Doctor's Hand

福井大学医学部附属病院呼吸器外科  
科長・准教授・診療教授

佐々木 正人

10

Medical LANDSCAPE

特定医療法人さくら千寿会  
さくら病院 院長

片山 寛次

18

Reliable Doctor's

さくら通り整形外科クリニック 院長

宇賀治 修平

24

Very Human

坂井市立三国病院 看護部

川端 眞由美 / 篠崎 瑛子 / 濱口 忍

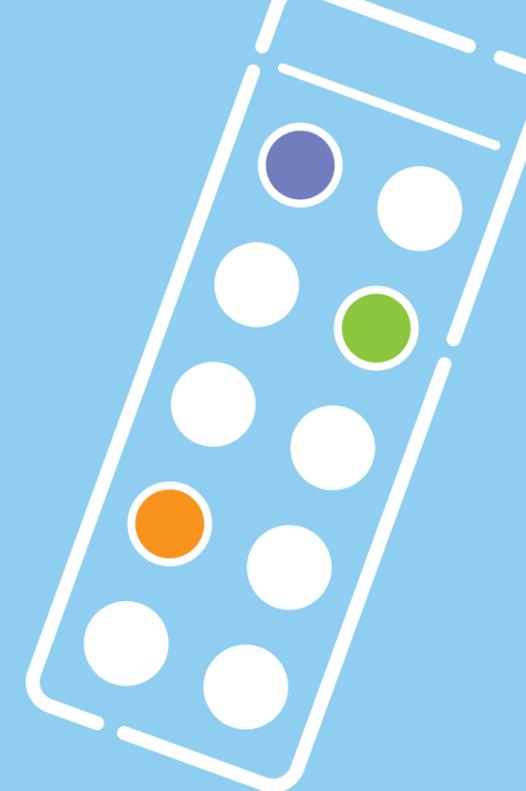
STAFF

Project Design 坂口 俊克  
Writer 上乗 繁能 / 大廣 涼  
Photographer 藤森 祐治  
Designer 吉田 真人 / 西村 恭子  
Cover Design 101%

発行/スキメディカル株式会社  
〒101-0044  
東京都千代田区鍛冶町二丁目6番1号  
堀内ビルディング2階  
TEL: 03-3254-1335 FAX: 03-3254-1339  
E-mail: t.sakaguchi@project-ishin.net

生み出すチカラ  
届けるチカラ  
伝えるチカラ

健康への願いをチカラに変えて。

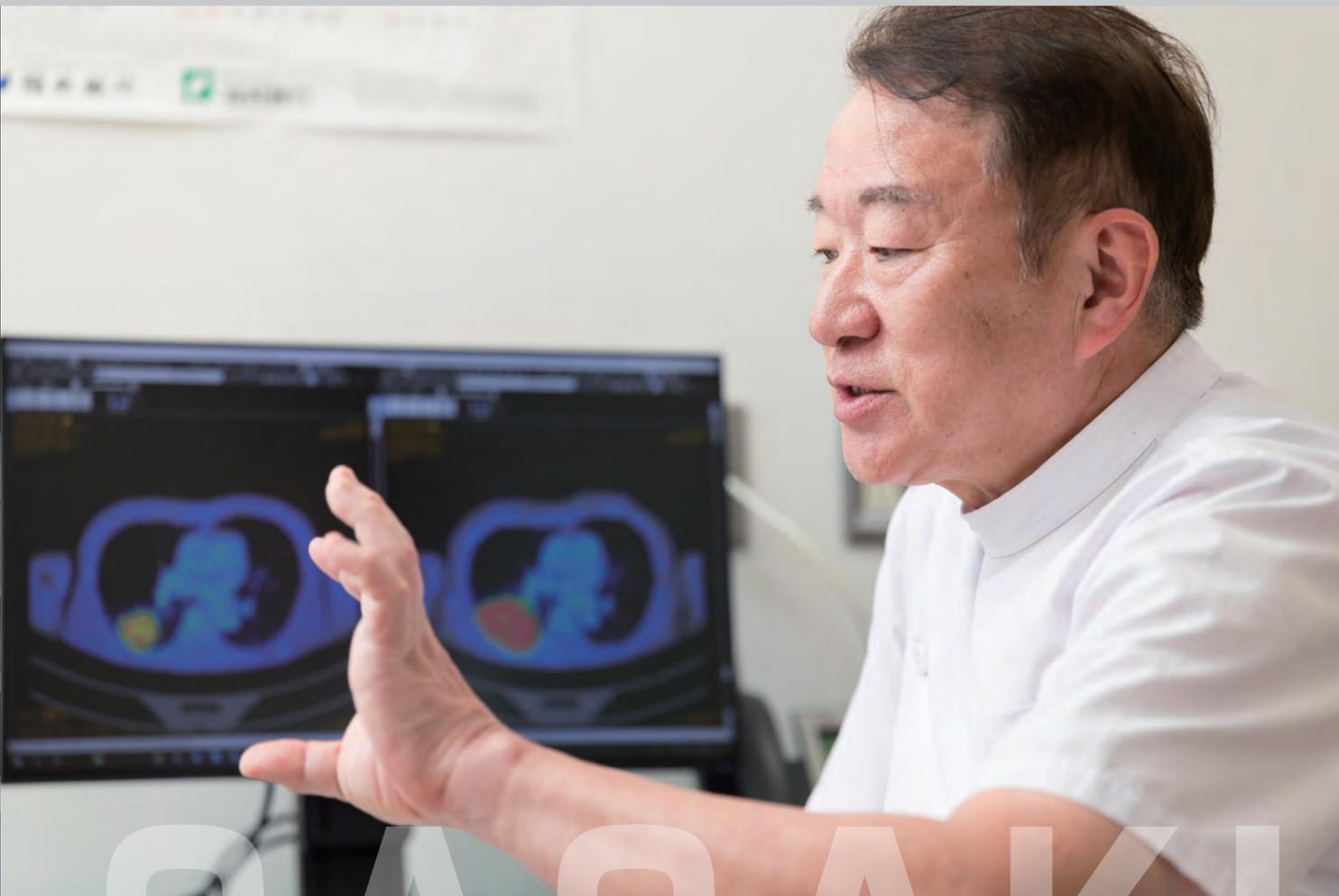
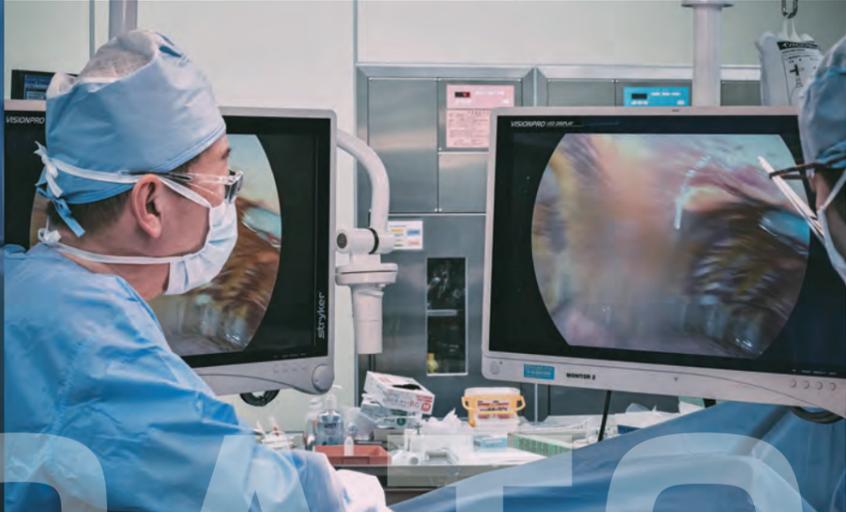
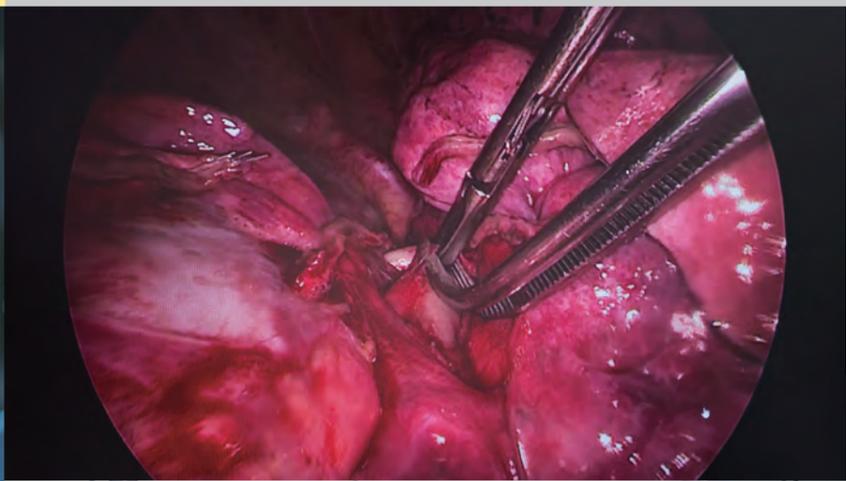


キョーリン リメディオ株式会社

**Kyorin**   
健康はキョーリンの願いです。

Doctor's **Hand** and  
**MASATO  
SASAKI**

医療を変える  
情熱をもつ。



# MASATO SASAKI

## 治療が大きく進化

「ここ1〜2年で、呼吸器領域の治療は劇的に変わりました。とくに肺がんは、世界規模で治療の選択肢が増え、局所進行肺がんに対する手術適応も増え、進行肺がんの予後も改善しております」  
 開口一番、佐々木正人診療教授は、呼吸器領域の治療が格段に進歩していることをアピールした。とくに「オプジーボ」や「キイトルーダ」といった、いわゆる免疫チェックポイント阻害剤の登場が、治療の選択肢を広げ、自身の専門である外科領域にも変化をもたらしているというのだ。

「肺がんの標準治療は、これまで手術、抗がん剤、放射線が3大治療法でした。その後、分子標的薬が加わり、最近ではオプジーボなどの免疫療法を含めて今や5大治療法になりつつあります。加えて、がんの遺伝子検査が肺がん症例では必須になり、PET検査による精度の高い病期診断が可能となりました。週に一度呼吸器内科、放射線科とともに合同カンファレンスで治療方針を決めるなど、内科医、外科医、そして、放射線科医が一丸となって取り組める、集学的な治療環境も、当院の大きな強みになっています」

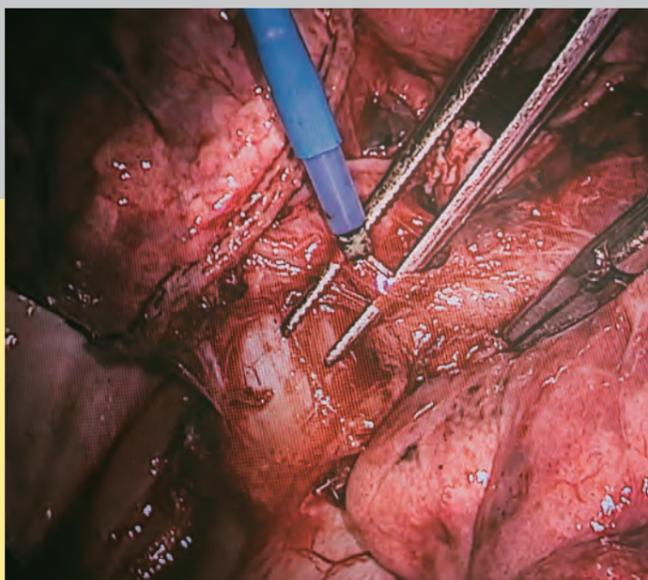
佐々木診療教授が専門とする、福井

大学医学部附属病院（以下、福井大学病院）呼吸器外科の一番の役割は、肺がんの外科的治療だ。それだけに、治療が難しいとされる局所進行肺がんや、転移が進む症例であっても「手術が可能な状態にもっていかれる」ことで、治療率はぐっと高まる。いまやステージ3や4といった進行肺がんであっても、「治せる」時代へと変わりつつあるのだ。

## 進行性肺がんが「治せる」時代

佐々木診療教授は、肺がんと食道がんを合併した患者が、劇的な改善を見せた画像を示し、治療経過を説明した。

「70代の患者さんで、検査時点で肺がんはステージ3aでリンパ節転移、さらに食道がんを合併していました。なかなか珍しいケースで、呼吸器内科をメインに、呼吸器外科、消化器内科、消化器外科、さらに腫瘍内科と放射線科の先生も入った合同カンファレンスで治療方針を決め、患者さんにも説明して、まずは抗がん剤と免疫チェックポイント阻害剤を併用するコースを4回実施しました。その結果、4カ月後の検査で肺がんが縮小し、ステージダウンして手術が可能な状態になりました。それで呼吸器外科で手術を行いました」



した。食道がんには、画像でほとんど確認できない状態にまで改善しています。人によって個人差があるので、誰でも同じ経過をたどるとは言えませんが、このケースは免疫治療と抗がん剤の併用が効果した症例だと言えると思います」

佐々木診療教授によると、この免疫療法では「自己免疫性の副作用が懸念され、内分泌代謝異常や間質性肺炎が発症したり、筋肉疾患や消化器疾患などで投与を中止せざるを得ない」場合もある。しかしこの患者は「何事もなく経過した」そうで、それも好結果につながった。

術に対する安全性、信頼性にある。最近、大血管に浸潤しているような局所進行肺がんなどに関して、県内全域から「大学病院に紹介されてくるケースが増えている」そうだ。しかし、治療の高度化や専門性が進む一方で、皮肉にも「外科医」は年々少なくなってきた。呼吸器外科医も同様で、佐々木診療教授は「呼吸器外科の魅力を医学生にアピールするためにも、肺がんの治療に関する研究会などを開催し、診療の輪をひろげていくべき」だと主張する。たとえば、2センチ以下の肺がんに対する縮小手術で、ロボット支援手

いずれにしても、肺がん領域ではここ最近「世界規模の臨床試験で、局所進行肺がんに対し手術前や手術後に免疫療法を行う症例が目白押し」状態で、2024年の肺がん診療のガイドラインもかなり変わり、「抗がん剤と免疫チェックポイント阻害剤の併用による治療が主流になっている」と打ち明ける。

### 専門性の高い診療科

福井大学病院の呼吸器外科では、年間200例を超える手術をこなす。うち半数近くを、肺がんの手術が占める。

術を導入する、あるいは研究室で、各種がん腫に対する試験管レベルでの「抗癌剤感受性試験」を行っていることも、若い医局員の励みになると考えている。「専門性の高い診療科なので、特殊性を生かしてより高度な技術が習得できる環境にあり、今後いろんな機会を通してサポートしていきたい」と、若手の成長を後押しする。

### 経験が技術や自信になる

「外科は結果がすぐに出る。患者さんも喜ぶ。シンプルにそう思いました」佐々木診療教授は、外科医になった

外科医・佐々木診療教授の真骨頂は、やはり胸腔鏡下手術だ。「1993年から胸腔鏡下手術を導入して30数年になります。呼吸器外科領域ではほぼ100%の使用率で、より低侵襲で安全な手術が行えて信頼性も高いものがあります。最近、胸部CTやPET検査など画像診断の発達により、肺がんを早期発見する機会が増えています。標準術式はもちろん、胸腔鏡下で肺機能を温存する積極的縮小手術や、ロボットアームを使った緻密な操作による安全なロボット支援手術も行っています」

福井大学病院の強みは、こうした手

理由をそう明かす。だが、もともとは医師ではなく、研究者の道を志した。「今、化石燃料による炭酸ガス排出が問題になっていますが、私は高校生のころ、炭酸ガスを排出しないクリーンなエネルギーができないかを考えていました。そのエネルギー源として核融合の研究をする道に進みたかったので。ただ、核融合を専門に行っている大学は当時、東大と名古屋大しかなく、自分の成績では難しいと思い、結局、断念しました。それで何か世のため、人のためになる職業に就きたいと思って、医師の道を選んだのです」ものづくりへの興味、関心から、入

# MASATO SASAKI

## PROFILE

佐々木 正人 ささき まさと

福井大学医学部附属病院呼吸器外科  
科長・准教授・診療教授

### 【略歴】

昭和63年3月 福井医科大学医学部医学科 卒業  
 昭和63年6月 福井医科大学医学部附属病院 医員（研修医）  
 平成元年6月 大阪赤十字病院呼吸器外科  
 平成2年6月 福井医科大学医学部附属病院 医員  
 平成3年4月 福井医科大学医学部 助手（外科学講座2）  
 平成4年4月 医療法人林病院 外科  
 平成7年5月 福井医科大学医学部 助手（外科学講座2）  
 平成15年10月 福井大学医学部助手  
 （器官制御医学講座外科学（2）領域）  
 平成18年4月 福井大学医学部附属病院呼吸器外科 診療科長  
 平成22年4月 福井大学医学部 准教授  
 （器官制御医学講座外科学（2）領域）  
 平成26年4月 福井大学医学部附属病院 診療教授



学した旧・福井医科大学（現・福井大学医学部）では、第二外科を選択した。このときに出会った2人の師が、後の人生を切り拓くきっかけとなる。

「第二外科の初代教授・村岡隆介先生と、当時講師であった千葉幸夫先生です。両先生から胸部外科のイロハを学びました。僕らの時代は第一外科が4人、第二外科が5人と外科の入局者がいました。最初の1年は大学において、次の1年は他の病院で研修を積むのが当時のプログラムでした。5人の入局者の専門は心臓血管外科2人、消化器外科2人、呼吸器外科1人で僕だったんですけど、それを「じゃんけん」で決めた覚えがあります。村岡先生は、肺も心臓も消化器もできる昔ながらの外科医で、僕も呼吸器外科が専門でしたが、大学に戻ってから3年目、4年目に心臓手術も消化器外科手術も含めて全部の疾患を経験しました。先生は、経験することが技術になり、自信になることを、身を持って教えたかったので、その頃の経験は今でも大いに役立っていると感じます」

手技や術式、手術道具の開発など、ものづくりに通ずる部分も、外科医として

での興味を掻き立てた。1990年代から、佐々木診療教授は若年層や難治性の気胸など良性の疾患にも積極的に取り組んだ。その気胸の治療に胸腔鏡下手術を採用、2000年に入って肺の表面にできる切除断端近傍のブラの新生を防ぐために吸収性メッシュシートを被せる「ジェリーフィッシュ法」という治療法を独自に考案、学会や論文で発表した。再発を防ぐために、いろんな方法を工夫する中で生まれた、新しい治療法だった。また、胸腔鏡下手術のポートの至適位置（Triangle Target Point）を決める概念も提唱し、論文に発表、当時の胸腔鏡下手術の先駆者的存在であった。

### 患者の一生に寄り添う

そうしたエピソードの一つひとつに、外科医としてのこだわりが垣間見える。診療にあたって、佐々木診療教授はいつもどんなことを心がけているのだろうか？

「ありふれた言い方ですが、病気のみを診ずして人も診よ」を常に心がけています。肺がんの治療を行うと、その患者さんの「一生の主治医」になるこ

とが多く、すべてを受け入れるつもりで診療にあたっています。インフォームドコンセントも、患者さんやご家族の立場に立った、わかりやすい情報提供と心のこもった医療をモットーにしています」

手術と向き合う時は、プロとして万全の準備をして臨む。術前の画像診断をもとに、スタッフと綿密な討論やシミュレーションを重ね、確実に手堅い手術操作で、根治をめざす。より低侵襲で、安全性を最優先に、最善の結果をもたらすために「万全を尽くす」。

「私たちにとっては年間200例のうちの1例でも、患者さんにとっては一生に一度の手術。そういう気持ちで、その日の1件にとにかく集中するようになっています」

手術や治療法は日々進化する。新しい方法を常に取り入れて、さらに先をめざすために今何をするか？

「目の前の医療に追われるのではなく、医療を変える情熱をもつ」佐々木診療教授は、若い医局員に向けてそうメッセージを贈った。

# 生きる力を 後押しする。

## 医療の基本は**栄養**だ

一般病床から  
地域包括ケア病床、  
医療療養病床を備えた  
ケアミックス型の施設として知られる  
さくら病院。  
何より患者の“生きる力”を後押しする。  
なかでも片山寛次院長が訴えるのは、  
栄養管理の重要性だ。  
福井大学医学部附属病院など  
急性期の最前線で培った豊富な経験を生かし、  
患者と向き合う。  
片山院長が、  
その真意を語った。

特定医療法人さくら千寿会  
さくら病院 院長

**片山寛次**



## 病院のイメージを変える

北陸自動車道を福井インターで降りて国道8号に向かって進む。鯖江方面に車を走らせると、やがて福井県済生会病院、福井赤十字病院などの基幹病院が見えてくる。下河北交差点を右折し、県道229号線に出て最初の信号を右に曲がると「さくら病院」の文字看板が目に入る。

インターからほぼ20分、幹線道路に面し病院からのアクセスもいい。ロケーションの良さが、そのままさくら病院の存在を際立たせていると言えなくもない。

「距離が近いこともあって、日赤（福井赤十字病院）、福井県立病院、福井大学医学部附属病院、福井県済生会病院などからの紹介が多いですね。下り搬送といって、基幹病院の救急外来で治療を受け、入院せずにそのまま直接当院に搬送されるケースもあるんですよ」

さくら病院は、主には急性期の治療を終えその後も継続的に入院療養が必要な患者はじめ、福井市全域の病院、クリニック、介護施設からの紹介患者などを受け持つ。基幹病院で感染症や外傷、骨折などの治療を受け、その後の療養を引き受けたり、栄養管理やリハビリ科を備えている。

## 患者や家族の話をじっくり聴く

現在71歳。年齢を感じさせない風格ある姿から、大病院や地域医療の現場で積み上げてきた豊富な経験が見え隠れする。医師になって最初に勤務した金沢大学附属病院では、旧第二外科に属し、肝胆膵外科や、後には胃、食道の手術にも参加した。その後、福井大学医学部附属病院に異動して大腸外科を任せられ、途中から肝胆膵外科を担当した。

「日本肝胆膵外科学会の高度技能指導医になりました。当時、福井県下ではまだ数少なかったと記憶しています。その後、膵臓の治療やがん性腹膜炎の治療に取り組み、手術と化学療法、温熱療法、放射線治療も組み合わせた集学的治療を研究、実施してきました。術後の栄養管理を含めて多くの患者さんの状態改善に尽力しました。その経験から、急性期の病院から紹介されてくる患者さんがどんな治療を受け、どういう経過をたどっているかはよく分かります」

急性期病院は在院日数が短く、緩和ケアや栄養管理まで十分な手が及ばな

ハビリテーションを目的とした転院患者も少なくない。

2022年に院長に就任してから3年余り。片山院長は、地域におけるさくら病院のイメージを変えた人でもある。「それまでは完全に療養型病院。どちらといえば老人病院と見られていた」（片山院長）。そのイメージを払拭し、総合診療を軸に、超急性期以外のすべての医療とケアをワンストップで提供する「コミュニティホスピタル」をめざしてきた。

「私自身もともと外科医で、がん診療や臨床栄養学、緩和医療を専門としてきました。がんはもちろん、心不全、腎臓病、脳血管障害、認知症やその他の慢性疾患から終末期に至るまで、入院治療から在宅医療まで、自分たちができることを最大限に生かし対応できるようにしてきました」

そう振り返るように、栄養治療、緩和ケアはもちろん、慢性疾患の管理、骨折や白内障、痔やヘルニアなどの手術も行い、「患者さんが穏やかに生きることをお手伝い」することに積極的に取り組んできた。ベッド数は63床と小規模だが、診療科の守備範囲は広い。内科、外科、整形外科、リハビリテーション科の他、眼科や消化器内科、消化器外科、肛門外科、呼吸器内科、糖

い。それゆえ片山院長は、紹介されてきた患者や家族にこの先どうしたいのかじっくり耳を傾ける。

「自宅や施設に帰りたいといえば、帰るためにどうするかを考えます。緩和ケアや栄養をしっかりと管理し、リハビリをして、患者さんの生きようとする力を後押しします。たとえばがんの治療の効果は栄養の維持が無ければ改善できませんし、早期からの緩和ケアも治療効果や生存率を改善します。他の疾患でも栄養管理をしっかり行うことで、状態改善が見込めるケースは少なくありません。要は、急性期から引き継いで、患者さんの意向に寄り添いながら、よりおだやかに社会復帰出来るようお手伝いすることが私たちの役割です」

患者の中には終末期や認知症の人もいる。看取りを依頼されることもある。しかし認知症があっても、患者の意思を尊重しながらどうしたいかを探り、気持ちを引き出し、安心した療養生活のために何が出来るかを考える。意思表示が難しい時は家族と相談して意思決定を支援する。そんなスタイルを貫いてきた。



PROFILE

片山寛次 かたやま・かんじ

1953年生まれ。関西医科大学卒。金沢大学旧第二外科に入局。外科診療や大学院での研究を経て福井大学第一外科へ。消化器外科医、がん専門医として肺癌やがんの腹膜転移の研究と臨床に従事。福井大学がん診療推進センター教授としてがん診療全般、緩和ケアに従事。また栄養部長としてNSTチェアマン、栄養教育にも従事してきた。趣味は剣道とスキー。

栄養改善で体は元気になる

さくら病院の強みは、がん診療や臨床栄養学、緩和ケアに基づいて、外来から入院治療、在宅医療までシームレスにカバーできることだ。とくに、福井大学医学部附属病院で33年間の長きにわたって勤務し、消化器外科医として重篤な疾患に携わってきた片山院長は、治療を開始する時点からの栄養管理と緩和ケアの重要性を訴える。

「苦痛の軽減と栄養管理はその後の治療成績を上げる重要な因子です。終末期においても患者さんが希望される場所で療養するには、栄養と緩和の技術が欠かせません。にもかかわらず、栄養治療の是非など、患者さんの意思確認についての申し送りが無い事やそもそもされていないケースに遭遇することがあります。時には、患者さん本人を交えずに、家族に対して『胃瘻は希望しませんよね?』と告げられることもあるようです。一般の人だけで無く、医療者でも胃瘻の適応や効果に対する誤解が多いと思います」

驚きを示しながら片山院長は栄養摂取の重要性を軽視しがちな医療のあり方に警鐘を鳴らす。

「嚥下障害などで経口摂取が十分でなくなると、手足の静脈から栄養輸液

がされますが、高濃度の輸液は血管を痛めますからすぐに血管が使えなくなります。中心静脈栄養を行えば、血管を痛めること無く高カロリーの栄養管理が可能ですが、人の免疫担当細胞の7割は腸管からの栄養素で養われていますので、腸を使った栄養に比べて免疫能が低下します。従って、長期的栄養には、胃瘻や腸瘻による経腸栄養が安全で効果的です。その上で経口摂取を目指して嚥下訓練を行い、胃瘻を除去出来ることが理想です」

片山院長が、栄養の重要性を強調するのは理由がある。福井大学医学部附属病院に勤務していた間、片山院長はNST (Nutrition Support Team) : 栄養サポートチーム) を率いていた。NSTは、病気や手術のために十分な食事が摂れない患者に対して最適な栄養補給の方法や、病気の回復などに有用な栄養管理の仕方などを医師や看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士や言語聴覚士などが集まって検討し、提案するチームだ。

当時、消化器外科医としてNSTに加わっていた片山院長は「大学病院の入院患者に食事や栄養についてアンケートを取ったところ、栄養状態の悪い患者さんが4割以上いて愕然とした」という。その結果から摂取カロリー

を重視した栄養ではなく、たんぱく質や脂質、ビタミン、ミネラルといった本来、体に必要な栄養価を摂取する重要性に気づき栄養の質を高める食事やメニューに目を向けた。体に正しい栄養が行き届かないと、治療効果も高まらない。たとえ短期の入院であっても、その患者に最適な食事や栄養補給方法を提供することは、退院後の食生活や栄養管理の改善にもつながる。そのことを実感したのだった。

骨惜しみはしない

片山院長に、そうした栄養管理の必要性を説いたのは、金沢大学で研修医1年目に出会った指導医だった。

「竹下先生は、小児外科医でした。食べれない患児の管理は難しく、多くを学べました。また、その頃の金沢大学では、膵臓がんに対して拡大手術を行っていました。膵臓と胃と十二指腸を取るだけでなく内臓神経やリンパ管をこそり切除すると、消化吸収機能が落ちて食事摂取してもそのまま下痢として排泄されてしまいます。栄養低下から免疫不全となり、次々と合併症が起りました。竹下先生の教えに従い四苦八苦して栄養管理をしながら、

大切なのは、栄養治療しながら患者さんの便の検査により消化吸収能を評価することが重要と考えました。その頃は患者さんや看護師さんとうんこの先生なんて呼ばれてました」

指導医から「患者さんのために骨惜しみはするな」と教わった片山院長は、いまもその言葉をモットーにする。患者の生きる力を後押しするには、治療に骨惜しみをしない。栄養管理やリハビリカンファレンスに参画し、スタッフとの意思疎通を欠かさない。

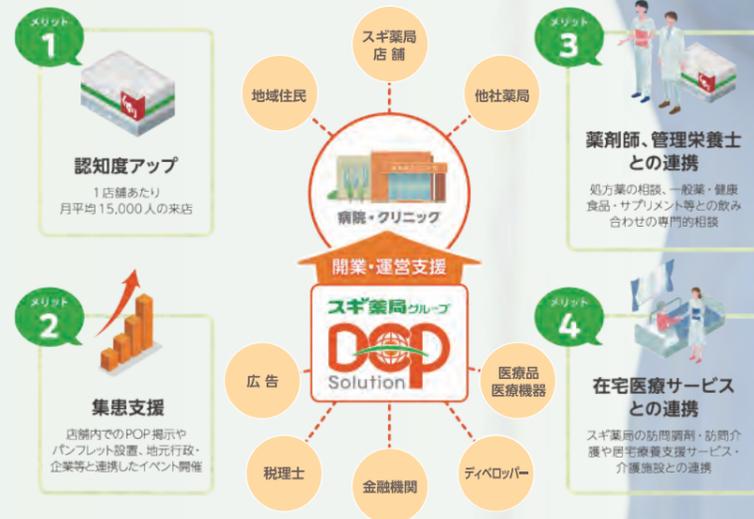
小学生のころ、兄が虫垂炎になり「その手術現場を見たい」と執刀医に申し出て、間近で見たことが外科医を志すきっかけになった。兄であり、グループを束ねる法人の片山外一理事長も同じく外科医である。

高校時代から剣道に親しみ、大学では同好会しかなかったため自ら剣道部を創部。初代主将として活躍した。以来、50年以上を経たいまも「年に数回は母校で現役部員と竹刀を交える」のが楽しみだという。段位は三段。自らを律し、患者のために骨身を惜しまない。そこには、いまなお現役医師として輝きを放つ片山院長の覚悟が垣間見えた。

# ドラッグストア併設で 理想の開業を!

## DCPソリューションの提供サービス

経営理念、診療方針の作成  
 開業までのスケジュール作成  
 開業地の選定、診療圏分析  
 事業計画の策定  
 融資の打診及び交渉  
 設計、内装業者紹介及びアドバイス  
 医療機器選定  
 税理士、公認会計士の紹介  
 広告相談  
 従業員募集、採用、教育の補助  
 開設手続き  
 開業後の経営支援、拡大展開  
 継承支援



DCPソリューションは  
 豊富な経験とネットワークを持つ  
 先生方のよきパートナーとして  
 開業支援サービスを提供しています。

開業の事例や先生方の声をご覧ください



0120-911-545

平日(土曜・日曜・祝日を除く)の9時00分~18時00分

### 拠点

- 関東エリア(本社) ●東京都千代田区鍛冶町一丁目7番6号  
ヒルトップ神田ビル
- 中部エリア ●愛知県大府市横根町新江62番地の1
- 関西エリア ●大阪府大阪市淀川区宮原一丁目2番4号  
新大阪第5ドビル13階
- 北陸・長野エリア ●石川県金沢市藤江北4丁目280番地

<https://dcp-sol.com/article/docvoice/>

# 足の外科に強みを持つ整形外科

## 笑顔で地域を明るくつつむ

さくら通り整形外科クリニック 院長

宇賀治 修平

### 子どもから高齢者まで 幅広い世代が通う

福井市中心部の東西に延びる幹線道路に沿って桜並木が続く。桜の名所として市民に親しまれてきた「さくら通り」に、令和5（2023）年5月に開院した「さくら通り整形外科クリニック」は、このクリニックならではの魅力にあふれている。

一例を挙げるならば雰囲気だ。待合室は白や木目調のやわらかなテイストで統一され、大通りに面してガラス張りのリハビリ室はゆとりある広さと天井高を確保し、太陽光が温かく降り注ぐ。スタッフもみな笑顔が印象的だ。

「今日はどうされましたか」「どこが痛みますか」。来院した二人ひとりに、優しく声をかけている。

「笑顔に接すると、痛みが緩和すると言われています。クリニックを訪れる方は、病气やけがで不安を抱えています。そんな気持ちを多少なりとも和らげてあげられるよう、明るい雰囲気づくりを心がけています」

こう話し、柔らかな表情を浮かべるのは宇賀治修平院長だ。クリニック内には広々としたキッズルームが用意されており、高齢者だけでなく、乳幼児を抱えた子育て世代も数多い。加えて、中学生から大学生まで、若い世代もちらほら。来院者の年齢層が幅広い点も同

クリニックの特色の一つだ。

### 自身の経験を踏まえ “足首から先”を診療

年齢を問わず、多くの人が来院する理由には、さくら通り整形外科クリニックの大きな強みがある。それは腰痛や関節症、ヘルニアといった一般整形の診療だけでなく、足の外科領域をとりわけ得意としている点だ。捻挫やかかとの骨折、外反母趾など、“足首から先”について専門的に診療するクリニックは北陸のみならず、全国的に見ても珍しい。さくら通り整形外科クリニックには、専門的な診療を受ける

ために、県外から足を運ぶ人も多いそうだ。

「足の外科領域は、整形外科医でもなかなか学ぶ機会は多くありません。ただ、足首の捻挫一つとっても、複数あるじん帯のどこが損傷したのかを見極めなければなりませんし、痛みの原因に骨折が隠れている場合もあります。正確に診療するには、深い知識と経験が必要です」と宇賀治院長。整形外科専門医として、“足の外科”を追究してきた背景には、自身の経験も深くかかわっている。

「中学校でバレーボールに打ち込んでいた時、何度も悩まされたのが捻挫でした。中学3年生の時も、最後の大会に挑む直前に足首をけがしてしま

い、出場をあきらめざるを得ませんでした。少子化が進む今は、チームスポーツもぎりぎりの人数で出場しているところが少なくありません。一人でも抜けると、本人だけでなく、チームにとっても大きな痛手です。捻挫はきちんと対処しなければいけないってしまいました。私のような悔しい思いをする子どもを一人でも減らしたいんです」

宇賀治院長はこう語り、足の外科診療に全力を注ぐ。もちろん、若年層だけに限った話ではない。足の傷みやけがなどで出歩く頻度が減れば運動不足に陥り、中年にとっても健康面への支障は大きい。さくら通り整形外科クリニックでは、足のトラブル解消に向けて靴の処方相談にも応じており、石川県の靴専門店「NOSAKA」が定期的に訪れ、自分の足に合ったシューフィッティングも実施している。

### 専門知識を生かして 地域スポーツを支援

足の外科領域とも深く関係するスポーツ領域も、さくら通り整形外科クリニックが診療に力を入れる分野の一つだ。宇賀治院長をはじめとした整形外科医に加え、看護師や理学療法士と



いった多職種連携で、けがのリハビリや体づくりのトレーニングをサポートしている。スポーツ選手の健康管理やけが予防、パフォーマンス向上を支えるアスレティックトレーナーの資格を持った理学療法士も在籍。近隣高校の強豪ハンドボール部のトレーナーも務めているという。

さくら通り整形外科クリニックとしても、バスケットボールの「福井ブローウィンズ」、サッカーの「福井ユナイテッドFC」のスポンサーとなるなど、地元スポーツチームの応援に力を入れる。宇賀治院長自身も、福井県在住のユーチューバー・カズさんのマラソンチーム「メロス」に所属。クリニックのスタッフと一緒に、令和6（2024）年に始まった福井さくらマラソンに参加しており、サブ4（4時間以内）を目標にトレーニングに汗を流している。

**安心・快適に受診できる環境づくりにも注力**

患者が安心・快適に受診できる環境づくりにも知恵を絞っている。例えば、来院時の待ち時間を減らすためにWeb予約に加え、県内でもまだ数少ないWeb問診を導入する。症状などをあ

み、平成31（2019）年からは福井県立病院で整形外科医長を務めた。地域の中核となる病院で臨床の現場に携わる中で芽生えた思いが、生まれ育った福井市にクリニックを開くきっかけになったという。

「今まで勤めてきた病院では、けがや骨折をしてから訪れる人がほとんどで、その治療にかかわることばかりでした。例えるならば、あふれ出た水をふくような感じです。そんな毎日を送る中で、水がこぼれないように、大元の蛇口を締めることができればと考えるようになりました」

都市部への人口流出や高齢化などを背景に、全国の地方都市では、高齢者だけの世帯が増えている。整形外科医として勤務する中で、宇賀治院長は、骨折などを境に寝たきりの介護状態になってしまったり、生きがいだった仕事が続けられなくなったりといったケースをたくさん目にしてきたという。

この経験が「予防医療」に重点を置いたクリニック開院へと舵を切る出発点になっている。そして、整形外科医だった父・行雄さんが営んでいた宇賀治整形外科医院を受け継ぎ、さくら整形外科クリニックをふるさとに開院。「笑顔で元氣な社会をいつまでも」を



らかじめオンラインで入力しておくことで、初診でもスムーズに診察できるように工夫している。

機器・設備の導入にも積極的で、最新のMRIを設置している。患者にとっては日を改めて大規模な病院でMRI検査を受けなくても済み、クリニックにとってもレントゲンだけでは分からない骨や腱などの状況を確認でき、スピーディーに正確な診断が可能となる。

また、福井県立病院や宮崎整形外科（福井市加茂河原）とも連携しており、整形外科手術が必要になったとしても安心だ。互いの医療機関が綿密に協力し合い、術前から退院までをしっかりとバックアップ。宇賀治院長がこれらの病院で執刀することもでき、退院後は再び、通い慣れたさくら通り整形外科クリニックで、リハビリに励むことができる態勢を整えている。

**予防医療への思いが開院のきっかけに**

数々の個性が際立つさくら通り整形外科クリニック。トップに立つ宇賀治院長は、金沢医科大学卒業後、金沢大学附属病院をはじめ、北陸のさまざまな病院で整形外科医として研鑽を積

理念に、宇賀治院長は、骨粗鬆症の診療など予防医療にも力を入れており、生活習慣病の改善や適切な運動のアドバイスにも熱心に取り組んでいる。

**人材教育にも注力  
スタッフの意欲を後押し**

そんな宇賀治院長のもと、34人のスタッフが、ともに地域に密着した医療に情熱を傾けている。整形外科医や看護師、理学療法士、放射線技師、医療事務がそろっており、平均年齢は33歳と若い。スタッフがさらなるステップアップができるよう、さくら通り整形外科クリニックは人材教育も強力に押し進めている。月に1度は全スタッフが集まる勉強会を企画しており、整形外科領域や医療安全、接遇など、さまざまなテーマで知識を深めている。

さらに、セミナーに参加する際の交通費を補助するなど、スキルアップを目指すスタッフの背中も後押しする。ヨガの講師資格を取得した看護師の要望に応え、休診日にクリニックを利用したヨガ教室を開催している。

「ヨガは腰痛の予防などに効果があり、教室は周産期の妊婦さんらを対象に実施しています。医療を通して明るく持続可能な社会をつくる」。私の

# 医療を支える。 人と地域の未来のために。

私たちが幸せな人生を歩むために、医療は、必要不可欠です。

しかし、世の中の変化とともに、医療は今、多くの課題を抱えています。

医療人材の採用から育成、キャリア支援、仕組み作りまで

私たち MCS は、HR（ヒューマンリソース）の分野で、医療の課題解決に向かいます。

医療関係者、生活者、地域社会、その未来のために。



「地域」と「医療」の架け橋として ヒューマンリソースの問題をトータルで支援する

詳しくは WEB へ



求めるレベルは高く、スタッフは大変だと思えます。それでもついてきてくれることに、いつも感謝しています。だからこそ、ともに挑戦してくれるスタッフを、これからも全力でサポートしていきます」

こうエールを送る宇賀治院長は、他にも認めるポジティブ思考だ。ご本人はあまり自覚していないそうだが、口ぐせは「ありだね」。見つめる視線は、いつでも前を向いている。「クリニックとしても、まだまだ成長していきたい。個に頼ることなく、患者さんがより安心・快適に診療を受けられる環境づくり、リハビリ室の機能拡充、オンライン診療の導入などを考えています。長期的には、デザイナーも視野に入れています」

最後にもう一つ、さくら通り整形外科クリニックならではの特色を紹介したい。それは、宇賀治院長のユーチューバーとしての顔である。クリニックで撮影し、毎週金曜に公開しており、現在100本近くが上がっている。

「内容は、足首やひざのけが、予防のための簡単ストレッチなど、多岐にわたります。限られた診察時間内では伝えられなかったことも、動画であれば詳しく紹介できますし、患者さんにも繰り返し確認してもらえます。ぜひ



### PROFILE

宇賀治 修平 うがじ・しゅうへい

【略歴】  
2011年 金沢医科大学卒業  
2013年 金沢大学整形外科医員  
2019年 福井県立病院 整形外科医長  
2021年 金沢大学大学院医学系研究科卒業 博士号取得  
2023年 さくら通り整形外科クリニック開院

【所属学会・資格】  
医学博士  
日本整形外科学会 整形外科専門医  
日本足の外科学会認定医  
日本スポーツ協会認定スポーツドクター  
日本骨粗鬆症学会認定医  
日本整形外科学会認定リハビリテーション医



『さくら通り整形外科クリニック』  
YouTubeチャンネル

「ご覧下さい」  
院長自ら先頭に立って、ここまで YouTube 配信に力を入れるクリニックは多くない。だが、型にはまる必要はない。地域を明るく元気にするために、さくら通り整形外科クリニックは患者に寄り添い、これからもチャレンジと成長を続けていくことだろう。宇賀治院長の言葉を借りるならば、これもまた「ありだね」である。



看護部長  
川端 真由美



篠崎 瑛子  
勤続年数15年



濱口 忍  
勤続年数9年

# Very Human

坂井市立三国病院

患者さんと、仲間への“思いやり”を胸に、  
出産から在宅医療まで地域のくらしを支える。

## 140年以上にわたって 住民主体の医療を提供

エントランスをくぐると、建物の真ん中につらえた吹き抜けが明るい雰囲気をつくり出している。今回、スポットを当てる坂井市立三国病院看護部は看護師・看護補助者を含めて103名（2025年2月現在）。ガラス張りの大開口から注ぐやわらかな自然光に照らされた看護スタッフの姿を通して浮かび上がってくるのは、地域に根差した医療のカタチ、と言えるだろう。

三国病院の歴史は古く、今から143年前の明治15（1882）年にさかのぼる。公立坂井病院として開院し、同22（1889）年に町立三国病院へ。そして、平成18（2006）年に坂井郡4町（三国町、丸岡町、春江町、坂井町）が合併し坂井市が誕生したのに伴い、現病院名に改称された。長年にわたって地域とともに歩んできた公立病院であり、内科や産婦人科、小児科、眼科、整形外科、脳神経外科、皮膚科などの幅広い診療科を構えている。市内で唯一、周産期医療に取り組んでいる点も特色の一つ。福井大学医学部附属病院や福井県立病院など高度医療を実践する拠点病院と、地域の診療所の中間に位置する総合病院であり、

出産から在宅医療まで、あらゆるライフステージを支え続けてきた。

そんな三国病院が掲げる基本理念は「患者様の立場を尊重し心のこもった優しい良質な医療を提供します」。明治から大正、昭和、平成、令和へと時代が移り変わっても、目の前の患者と向き合う姿勢を第一に考えており、川端真由美看護部長もこう話す。

「病院の理念を実現するために、看護部が果たす使命は、『地域に密着し、信頼され温もりのある看護を提供すること』に尽きます」

## 3階に一般病棟、 4階には地域包括ケア病棟

三国病院看護部には、主に2つの病棟が存在する。一つは3階の一般病棟である。

「急性期の一般病床は54床あり、整形外科や眼科、耳鼻咽喉科の術前術後、内科一般の患者さんの対応をしています。地域柄、高齢者の方が多く入院していますので、ADL（日常生活動作）やQOL（生活の質）が低下しないように気を配っています」

こう教えてくれたのは、三国病院に15年間勤務する篠崎瑛子さんだ。さらに続ける。



より地域に密着した看護に乗り出している。

**多職種との協力体制と、いきいき働ける環境が魅力**

看護師は患者やその家族と直接かわることが多い職業だ。

「それだけに、地域の皆さまに安心してくらしただけのよう、坂井市に三国病院があつてよかつたと思つてもらえる医療機関をめざしています」

川端部長はこう言葉に力を込め、看護部の歩んでいく指針として、①患者さんの個性や倫理面を配慮し、在宅医療につながる看護の実践、②多職種と連携・協働し、看護の力を最大限に発揮する、③いきいきと働き続けられる職場づくりと人材育成——の3つを掲げている。目標に向かって歩を進めていく中でこれらのポイントは、三国病院看護部の強みとして着実に根づいているようだ。

例えば、多職種との連携・協働に関しては、一般病棟、地域包括ケア病棟ともに日常の光景になっている。

「三国病院は規模がほどよく、看護部以外のスタッフとも皆さん顔なじみです。患者さんが住み慣れた地域で過ごせるよう、退院後の生活をイメージ

えています。患者さんに「待ってたよ。あなたの声や話し方は穏やかで癒やされるわ」とおっしゃっていただくことがあり、そんなときに看護師として働くやりがいを感じています」

こう語る濱口さんも、一般病棟で幅広い世代の患者のケアにあたる篠崎さんも、ともに旧三国町出身で、実は中学時代の同級生だという。看護師免許を取得後、濱口さんは大阪、篠崎さんは福井県内外のほかの病院に勤めていたが、ふるさとへの強い思いから地元に戻ってきた。生まれ育った地で、地域医療の最前線に立つ二人を見ていると、看護職者にとって人に寄り添うことの大切さが伝わってくる。

川端部長が看護スタッフに求めるのも、まさにこの姿勢だ。

「看護師として働くうえで『思いやり』がとても大切です。それは患者さんだけでなく、一緒に働く仲間に対しても。ベテラン・新人関係なく、お互いに思いやることで、学び合える環境が生まれます。そこそが人材教育の要だと思っています」

思いやりを大切に、温もりある看護を実践する三国病院看護部。このほかに中央部門として外来・手術室と透析室があり、令和5（2023）年5月には訪問看護ステーションを設立し、

し、理学療法士や言語聴覚士、ソーシャルワーカーなど多職種とは常に連携を取っています」（篠崎さん）

20代から60代まで幅広い世代がそろった看護部のチームワークのよさも、三国病院のアピールポイントと言える。子育て世代も数多く活躍しており、地域包括ケア病棟の濱口さんもその一人だ。

「昨年、長男を出産した際に育児をいただきました。福利厚生もしっかりしていますし、時短勤務など育児と仕事を両立しやすい制度も整っています。近くに住む実家の親や病棟の同僚にも助けてもらいながら、フルタイムで働くことができています」

川端部長は、さらにいきいきと働き続けられる職場となるよう知恵を絞っており、その一環として年に1度はスタッフ全員との面談を心がけている。時間を見つけては病棟にも足を運び、現場の考え方や意見にも積極的に耳を傾けているという。

**「役に立ちたい」その思いが第一歩に**

ところで、地域医療の最前線に立つ看護師はどのような思いを胸に、医療の道へと足を踏み入れたのだろうか。三国病院で働く篠崎さんと濱口さんの



「市内で唯一の産婦人科があり、助産師と協力し、出産の介助をすることもあります。大変さも感じますが、やはり誕生の瞬間に立ち会える喜びは大きいですよ」

一般病棟で治療を行い、症状が落ち着いた方が次のステップとして移るのが、看護スタッフが活躍するもう一つの舞台となる「地域包括ケア病棟」である。現在、4階に43床ある同病棟は平成29（2017）年に開設された。三国病院で看護師として働き始めて9年目を迎えた濱口忍さんは、穏やかな語り口でこう話す。

「元の生活に戻れるようリハビリなどをサポートするのが、地域包括ケア病棟担当の私たちの仕事です。ご本人はもちろん、ともに支えるご家族の思いにも耳を傾け、これからのライフプランを考えていきます」

地域包括ケア病棟では、2カ月ほどで在宅へと戻っていく人が多いというが、退院までの過程は誰もが順風満帆というわけではない。これまで当たり前前にできていたことが病気やけがの影響でできないようになり、忸怩たる思いを抱えている人も多い。

「患者さんそれぞれに合ったケアが大切です。気持ちよく取りながら、そつと背中を押すことができればと考

えています。患者さんに「待ってたよ。あなたの声や話し方は穏やかで癒やされるわ」とおっしゃっていただくことがあり、そんなときに看護師として働くやりがいを感じています」

こう語る濱口さんも、一般病棟で幅広い世代の患者のケアにあたる篠崎さんも、ともに旧三国町出身で、実は中学時代の同級生だという。看護師免許を取得後、濱口さんは大阪、篠崎さんは福井県内外のほかの病院に勤めていたが、ふるさとへの強い思いから地元に戻ってきた。生まれ育った地で、地域医療の最前線に立つ二人を見ていると、看護職者にとって人に寄り添うことの大切さが伝わってくる。

川端部長が看護スタッフに求めるのも、まさにこの姿勢だ。

「看護師として働くうえで『思いやり』がとても大切です。それは患者さんだけでなく、一緒に働く仲間に対しても。ベテラン・新人関係なく、お互いに思いやることで、学び合える環境が生まれます。そこそが人材教育の要だと思っています」

思いやりを大切に、温もりある看護を実践する三国病院看護部。このほかに中央部門として外来・手術室と透析室があり、令和5（2023）年5月には訪問看護ステーションを設立し、

## 変わりゆく時代に 新しい医療を

この度、第7号を発刊することができました。

取材に協力していただきました医療者の方、  
協賛して頂きました企業様におかれましては  
心より感謝申し上げます。

今後とも末永くご支援の程よろしくお願い申し上げます。

これからもわたしたちは、はたらく医療者の姿を、  
地域の医療界全体へ発信してまいります。

協賛社  
募集中

私たちは「医療情報誌 neo」の活動に  
ご賛同いただけるスポンサーを募っています。

neo  
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

想いを伝える、力を貸してください。

場合「人の役に立ちたい」との気持ちからだった。

「高校生のころ、医療系の道を志す同級生が何人かいました。その影響もあって、人のために働く看護師という職業に興味を持ちました。三国病院で働くきっかけは、再就職先を探していたときに事務職として働いていた知人からの紹介です。地域でくらす方をケアし、地域医療に貢献する看護に魅力を感じました」（篠崎さん）

「私の場合、父ががんになったことが看護師をめざす一歩になりました。20代前半だった当時、全く違う仕事をしていた闘病中の父のそばにいたいしかできません。自分自身に歯がゆさを感じる中、看護師だった姉の存在が本当に心強く、私も人を支える看護の道を志しました」（濱口さん）

それぞれの道をたどりながらも二人は今、ともに三国病院看護部で住民一人ひとりのくらしに真摯に向き合っている。部門をリードする川端部長も坂井市出身で、福井大学医学部附属病院で長年にわたって勤めた後、令和5（2023）年4月に三国病院に赴任した。

「大学病院とは違う環境に最初はとまどいもありました。そこからスタッフみんなと日々、協力し合う中で地元

密着の看護ができていることに感謝していますし、誇らしさも感じています。これからも市民の皆さんが安心できる医療・看護を提供し、地域に貢献していきたい。ともにがんばっていきましょう」

### アットホームな看護部で 自身の成長を一歩ずつ

今回お話を聞いた三国病院看護部の三人は、川端部長をはじめ地域医療と向き合う毎日に充実感をにじませていたのが印象的だ。もちろん、看護師として歩み始めたときから何もかもがうまく進んできたわけではないだろう。ここには書き切れないほどの苦い経験を何度も重ねる中で、現在地に至ったのだ。

川端部長はこの道で働き始めたころを振り返りながら、看護師をめざす人や新人看護師にエールを送る。

「大学病院に入ったとき、配属病棟での同期は4人。思い返すと、最も出来が悪かったのは私です。『合わない仕事を選んでしまった』と、後悔したことは一度や二度ではありません。それでも、数々の診療科を回って先輩に指導してもらい、仲間に支えられ、患者さんからは「人」として大切なこと

をいくつも教えてもらいました。その中で一歩ずつ成長できたのだと思います」

濱口さんも新人のころ、うまくいかない毎日に涙を流したことがあるという。

「看護師国家試験に合格し、どこか心の中でゴールだと感じていたので。本当はスタートラインに立ったばかりなのに。看護師として踏み出したばかりの人にはその自覚を持って、日々の仕事に向き合ってほしいですね。今はつらいと思っても、努力は自信となり、自信は結果につながります」

27歳から働く篠崎さんは、三国病院看護部での日々を通して大きく成長した。そんな自身の経験をもとに後輩たちに呼びかける。

「看護の仕事は大変なこともありま。命と向き合う日々には不安もあります。それでも、三国病院はアットホームな雰囲気、周りには相談できる先輩がたくさんいます。地域に根差した看護や周産期医療に興味のある方は、ぜひ一緒に働きましょう」

あくまでも自然体。気負うことなく温かなメッセージを寄せてくれた三人の言葉に、医療人としての成長を後押しする三国病院看護部の働きやすさが色濃く表れていた。

### 令和7年度看護職員募集要項

#### 1. 募集区分、採用予定人員等

看護師 4名/助産師 2名（採用予定年月日：令和8年4月1日）

#### 2. 受験資格

昭和61年4月2日以降に生まれた人で、保健師助産師看護師法（昭和23年法律第203号）による看護師または助産師の免許を有する人  
（令和7年度中において実施される国家試験で免許を取得見込みの人を含む）

#### 3. 試験の日時

第1回 令和7年5月24日（土）/第2回 令和7年7月26日（土）/第3回 令和7年9月27日（土）  
（合格者数が採用予定人員に達した場合、その後の試験は実施しません）



詳しくはこちら



ニプロは、います。  
世界みんなの命のそばに。



新領域に果敢に挑み、  
さらに多くの人々に信頼される **NIPRO** をめざしています。

Medical supplies for the world population

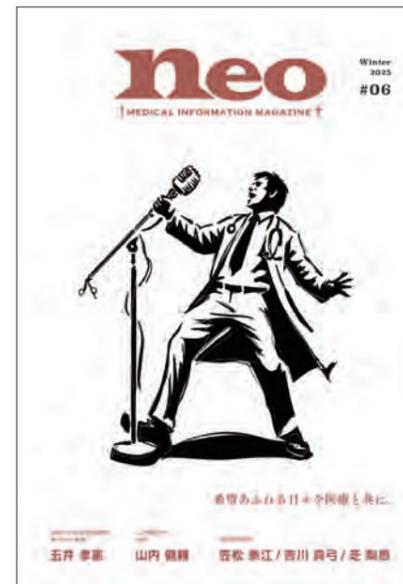
**ニプロ株式会社**

〒566-8510 大阪府摂津市千里丘新町3番26号



福井県内で活躍する医療従事者に焦点を当てた地域密着医療情報誌として、県内の医療機関へ3カ月に一度配布しております。最先端医療から地域医療、また人々の暮らしに寄り添うクリニック、在宅医療・福祉など幅広い分野を取り上げております。この雑誌が福井県内の医療者と医療者を結ぶひとつの情報ツールとなり、福井県の医療活性化に少しでもお役に立てることを目的としております。

バックナンバー紹介



#06 希望あふれる日々を医療と共に。

Doctor's Hand  
**先進的な医療と地域完結  
難治性のがん治療に挑む**  
福井大学医学部附属病院 第一外科 教授  
五井 孝憲

Medical LANDSCAPE  
**ここで完結させ、頼られる地域医療を担う。**  
山内整形外科 院長  
山内 健輔

Very Human  
**妊娠から出産 子育て 親子の幸せを願い 見守り続ける**  
福井愛育病院  
笠松 泰江 / 吉川 真弓 / 芝 梨恵



